

# ゆきぎのみち

日本古神  
道研究会

皇紀 二六六二年 四月 六日 横浜定例講演より

## 『神葬祭かくあるべし』

先月までは神様との接し方についてのお話をさせて頂きました。本来ですと、その続きをとということになるかと思いますが、今日は、皆様方に本来ですと直接申し上げる必要はないのですが、今日のお話の内容との関わりがございますので、ご報告申し上げます。

比売大神様の御役をしておられました美津子先生のお母様が、四月三日午前十時三十八分神上がられました。仮通夜を終え、通夜祭を終え、昨日一般に言われている告別式、葬場祭等も終え、今日は翌日祭という事でございます。

なぜこんなお話をするかと言いますと、その間に随分とお教えを頂いた部分がございます。世の中で伝わっている事とは随分異なりがございますので、そういった事を含めて皆さんにお話させて頂きたいと思えます。記憶に新しい時でないところからも忘れてしまうといけませんので、そういった意味でこの機会に皆さんに実際のあの世というものを、皆さんが株立ちをされて行く先によって全部違うのだということを実感いたしましたので。

一般には仏教でなさる場合が多いと思いますが、私も美津子先生のご実家のお寺さんの方でお願いをさせて頂こうかなと思つたのですが、出来得れば神様の御役をなさられていた方ですので、神道で行った方がよいのではないかと美津子先生にそう申し上げましたら、いわゆる葬儀屋さんの方では、近くの神社関係の方を紹介頂いたのですが、その方ご自身がどうこうではありませんが、本来の意味での神葬祭は出来ないであろう、神の世界に通じないであろうと思われましたので、それならば、異例な事ですが、家族がするというのは異例な事ではあるけれど、お母様も生前「私に」と言っておられたので、この際大神様に直接お願いをして、私が直接させて頂くことになりました。普通、家族の人はお食事等のお手伝いなども一切してはいけないう言うのですが、家族であると同時に神主としての役目をさせて頂いたのです。

## 先祖供養は 神道から

神道では神葬祭というように申し上げます。神道における葬儀のことです。元々先祖供養というものはこの神道における神葬祭が中心であった訳です。ところが仏教が伝来をする。私達が学校で習う時は聖徳太子の時代に仏教が伝来したとだけ習いますが、その時に日本の国には昔から先祖供養の風習があり、それを取り入れなければ布教できなかったために、仏教の側で先祖供養を取り入れたのだということは習いません。その神葬祭のあと先祖供養になるわけですけれど、先祖供養そのものを受け入れない日本では布教できなかったのです。

お釈迦様の教えというものは、「私達の生き様を教えている」のでございます。人の生き様を教えている。皆さんは仏教があの世の事、法要も全部含んでしてくれるものと思っておられるけれど

も、それはお釈迦様の教えではございません。教えとしては全くございません。

お弟子さんのお一方が『自分の母親は一体あの世のどこへ行っているのでしょうか』というのでお見せを頂いた所が一箇所あるだけです。お釈迦様は私達の生き様を教えたのであって、あの世のことは何一つ説いておられません。

## 行くべき所に 送って差し上げる

その辺りも皆さんが誤解をしてもらえる。なんとなくお経を上げてもらえばあの世の方への供養ができてくるのではないかと風にして送って差し上げるといった時には、あの世の行くべきところに送って差し上げることが一番大切なのです。お釈迦様の教えに無い物を、お経を上げるだけでは、行くべきところに行くことはできないのです。

皆さんが一般に言われているのは、まず産土神社、自分の住んでいる所のお宮さんに報告祭、氏子であるわけですから、氏子であった誰それが「※神上がり」ました、或いは「神去り」ましたという事を神社に報告をする。

私の場合は大神様に直接ご報告申し上げたわけです。

※・十頁からの『師と美津子先生の対談』参照

その時に大神様にご報告申し上げると同時に、この御神殿の丁度お鏡のところが大神様、そのお鏡の向かって右隣が比売大神様、その比売大神様の御役をなさられていたお母様です。「出来得れば比売大神様の御元」と申し上げたら、即お許しを頂いた。その旨を美津子先生に申し上げていなかったため、美津子先生はまだお母さんが比売大神様の御元におられることを知らなかった

のです。

以前に私が東京に出てきた時にお世話になった父親の伯母に当たる方が亡くなられた時に、鴨居の辺りに出られてニコニコと笑いながら話しかけ、私も「伯母さん、高いところに行けてよかつたね」って話を致しました。皆さんが泣いてる訳ですから私だけがニコニコ笑っている訳にはいけません。

そういう話をしていたものですから、美津子先生は鴨居の高さをぐるーっと探したけれどいい。「私には分からないのだから」と悩んだということですが、このようにですね、人の行く先によって違うのですね。

## 成仏して下さい と言っても

人が亡くなると、一様に皆「成仏して下さい」と言いますが、「成仏」というのは仏界に行かれるということです。今、今の世の中に亡くなってすぐに仏界に行かれる人は殆どいらっしゃいません。本当にその人のことを思って「成仏して下さい」と言っているのならまだよいのですが、本心は「私に憑かないで」とか「縋らないで」という思いで言っている人が多いのではないのでしょうか。

通常は霊界・幽界に行く事自体が全体の三割無いのですから、そこに行かれるだけでもありがたい事です。仏界以上になりますと非常に限られて参ります。まして神界へ入られる方は今の世に一世紀に一人いるかいないかだと言われている訳です。

お母様が二十一世紀になった今行かれたから、「もう二十一世紀に神界へ行かれる人はいないわ」と言われると困りますね。そうじゃないですか。今、ここに居る人は誰一人神界に行かれ

ないことになりました。一世に一人居るか居ないかという梓を広げて頂くしかありません。

## 高天原で 会おうぞ

御霊入れ者の場合は、「高天原で会おうぞ」って大神様が言ってお下さっている訳です。それから、全員高天原へ行ける訳です。特に私達の結婚式で色紙を頂いた方は、それが高天原への通行手形です。「私、これ持っています。高天原へ通して下さい」と言えるのです。いいですか、色紙を持っている人は「高天原への通行手形を持っていますから」と言ってお高天原へ行けるのです。大神様は「高天原で会おうぞ」と言ってお下さっています。

神上がられた当日は仮通夜として、翌日が通夜祭ですね。その通夜祭の担当の神様と、その翌日、いわゆる一般に告別式という神道では葬場祭ですが、その二つの担当の神様が、「大神様からの直接の御命令によって参りました」として挨拶に来られたのです。もう満杯で、いっぱいのお神様をブワーツと引き連れてどちらも御見えになられたのです。という事で、「ああ、神様の世界の準備は万端に整ったのだな」とその場でもう知らせて頂いた。さて、困ったのは祝詞です。

神社本庁で出している、基本になる「こういう祝詞を書くんですよ」と手本になっているのを見ますと、皆『哀れ』とか『あな悲し』、『口惜し』とか、いろいろ書いてあるのです。神様の世界、高天原へ御呼び頂いているのに、「あな悲し」だの、「哀れ」という表現は全然合わないのです。

ですから、そこを全部変えなければいけない。そういう事はこちらとしては気を使ったのです。『悲し』とか『哀れ』ではな

く、『喜び』『嬉み』そういう感じになる。やむを得ないところは、「人の世においては、悲しき別れであるけれども、高天原の神様の元に御召しを頂いて有り難うございました」という感じの文章になる訳です。

## 行く先によって 全て変わる

亡くなられた方の行く先によって、祝詞の文章も全部違うという事ですね。まず一番に産土神社への報告祭があります。二番目が、枕直し、「枕直しの儀」です。これは神道の場合ですから、皆さんは憶える必要はありません。ただ、こういう中で次々とお話をして下さっています。一般的な意味で、これは北枕にします。そして、枕の少し離れたところにお刀を置くというだけで、ここでは祝詞はございません。

次が、「納棺の儀」と言われて、これは、まあ親族の方とか、世話になった方が、一緒に亡骸を棺の中に納め、又、ご本人の思いの品、共に旅立たせて差し上げたい品々をそこに納めるという、その儀式でございますから、これも祝詞はございません。

お母様の場合には、

『人の世に手本としての御教えぞ 育てし御子にわれも謝す』  
と、美津子先生の

『今更に母の教えが身に沁みて 神の佳き日に今嫁ぎます』  
という色紙を納めさせて頂いたのです。

(次頁に色紙の写真を掲載しています)

それから、夜になって、今度四番目に通夜祭というのがあります。ここから、祝詞が必要になって参ります。